

文化祭参加 十一月十一日 昼立川市中央
琵琶演奏会 公民館、主催立川市、主管立
川市琵琶研究会。金剛石、石黒門下十三人合
奏、五条橋、小峯婦水、茨木、坂井、白
虎隊、小川吐水、その日の東郷大将、栗原雨
竹、西郷隆盛、伊藤警水、彰義隊、清水源城、
井伊大老、村木桜柳、軍神広瀬中佐、石黒錦
歌、(以下来賓) 扇の的、水藤五郎、壇の浦
一、広瀬翠紅、常陸丸、仲川秀邦、大高源吾、
木原綾子、滝口入道、関口竜城、吉野落(下)、
岡部錦蝶、舟井慶、日原錦楼。

赤穂義士 十一月十八日 昼東大阪市立
追慕演奏会 老人憩いの家、主催東大阪市
文化連盟、筑前琵琶東大阪旭会。秋風故郷の
山、駒栄旭良、老公漫遊、樋口旭総、堅田落
一、戸倉旭嶺、高田の馬場、山本旭紅、松の廊
下、高千穂旭楓、長矩公桜の別、尾山旭瑞常、
名残の緒、若宮旭登、寺坂吉右エ門、伊藤
旭暢、村上喜剣、樹本旭風、赤垣源蔵、下条
旭仙、大高源吾、柴田旭堂、清水一角、木庭
旭山、義士の本懐、田中旭昇、浜本旭好、大
石主税、大垣旭景、義侠の鑑、松岡旭岡。

筑前琵琶詩吟 十一月十八日 昼京都
合同温習会 白峯神宮、主催京都旭
穂会。船弁慶、中島旭穂、柳の精、谷旭郎、
川中島、岩井旭洋、堅田落、森田旭峰、榎田
旭扇、絃旭穂。外に詩吟剣舞等曲十五題。

日本琵琶振興会 十一月二十五日 昼東京
月例親睦研究会 新宿洲鳳会館。十分以内
に短縮した琵琶の競演、数氏の外望月江氏に
よる伊集院流第五弾法「切り」の講習があり
又名手の録音鑑賞などを行い八時散会した。

第五回 十一月二十五日 昼浜松市西
琵琶演奏会 遠莊大広間、主催小野鶴彦会
遠州洋を行く、佐野、金州城、村松、桜、須
部、平那の峯、河西、木枯、野末、虞美人草
一、石川、軽々小島、小野、澤陽江、染谷晃
岳、同、青島晃苑、吉野山懐古、伊藤晃嶺、
三方ヶ原、三上晃城、平手監物、柿沢晃峰、
由比正雪、大石晃月、茨木、庵原佑水、城山
一、東京清川嵐舟、老公漫遊、同吉田旭明、常
陸丸、同仲川秀邦、時は今、京都平井春嶺、
本能寺、会主小野鶴彦。

高橋洋水氏 十月二十二日 逝去、享年八十
一。錦心流名手として令名高かった。謹んで
哀悼の意を表します。

(予 告)

○京都琵琶協会一月定期茶話会 一月十二
日(土)午後一時、会員平井春嶺氏宅

○浅野晴風会新年演奏会 一月十三日(日)
昼東京高円寺会館

○日本琵琶振興会一月懇親例会 一月二十
七日(日)正午、東京新宿洲鳳会館

○小川吟水氏テレビ放映 二月三日(日)

夕六時より入り、開局十周年記念「日本
史の眼」熊野詣」に「教盛」の一節放映

あ 明けましてお目出とうございます
旧年中は色々有難うございました。
本年もどうぞよろしく御願ひ申上げ
ます。二年続きの暖冬に反して今年
の冬は物凄く寒気、しかも灯油や電気瓦斯な
ど可熱原料不足でこれから春までの数十日を
どうして過ごせばよいか。公害、物価、イ
ンフレ、鉄道、郵便と困った問題の山積、特
に郵便ストは一番頭にくる。東京からの手紙
が十五日間、近い大阪京都からでさえ十日か
つている、明治生まれの筆者などには常識
では到底考えられない。しかし心配はご無用
私達には寒さを克服し難問題に耐え得る何物
にも代え難い貴重な武器がある、それは琵琶!!
悪いあとには必ず良い事が廻って来る、心
配しなさんな。新年号には巻頭に、年賀の辞
を載せるべきかも知れぬが決り切った紋切型
の文句を堅苦しく並べ立てるのもどうかと思
い殊更これをやめて本欄でお正月のお祝
と御挨拶を申上げることとす。

昭和四十九年一月一日発行 (非売品)
編集者 植村 稟 水
発行所 京 植 村 稟 社
〒569 高槻市津之江北町一ノ二三
電話 〇七六六五六〇五一番

琵琶 機関紙

京

結

第二三五号 京 絃 社

我が道を行く六十五年 (一一)

西郷 天 風



思えば去る明治四十四年の春頃だったろう、
日清製粉では宇都宮に製粉工場を設置するこ
ととなり、兄がその担当者として現地に移住
した、居候の私はこの館林町に居残り、専ら
琵琶師匠の傍ら写真の助手や、庭球クラブを
結成して、近郷の各学校庭球部相手に対抗試
合などを楽しんでた。

この館林には富貴座と云う、かなり大きい
劇場があり、その隣りに富貴館と云う割烹旅
館を経営する打木正夫氏は、趣味の上での写
真館を兼営してあるので、薩摩琵琶竹生会で
も新年温習会の記念写真を頼んだことから打
木氏と交遊が始まり、やがてその写真部の助
手を引受けた私は富貴旅館の一室に住むこと
になった。

打木氏は其数年前、東京品川に開校された
日本で初めての写真学校第一期卒業生で、も
ともと道楽半分の気儘な写真師だったが、一
人の助手が加わったことよって張合いが出
たと悦に入って居る誠に呑気な人物だった。

そもそも私がこの町に初めて来た時はツツ
ジの花の季節で、宣伝ポスターにひかれ観光
かたがた兄を訪問する為めだったが、さ程大
きくもない町とは云え町内至る所観光客でゴ
ツタ返しており、なかでも良家の令嬢風の娘
子軍が街の隅々まで氾濫の有様には驚きを禁
じ得なかつた。聞けば此の町には日本屈指の
機業会社東洋モスリンの工場があり、ツツジ
の季節には毎年二千余名の女工員を総動員し
て、新柄製品宣伝の為め街全域を舞台にファ
ッションショウを展開するのが例とのことだ
令嬢姿の殆どがそのモデルになった女工員だ
ったのである。それも今日の常識から見れば
別に驚嘆に値するものではなからうが、今よ
り六十年前の未だ外国かぶれの無い、つまま
しい国民社会の時代としては正に劃期的思い
付であり驚異的風情だった。

亦花の名所で知られた尾引城跡のツツジが
岡公園には、数百本のツツジの大本が根元か
ら数知れぬ枝を延して巨大な株を形成し、そ

の小枝は隣の同じ様な株の小枝と相接して色
とりどりの花のトンネルとなり、人々はコド
ミ勝ちにくぐりぬけながら、次から次へと足
を運ぶその様は見るからに楽しげであり、一
方起伏する芝生の丘には其道の通人達が持参
の酒肴で思い思いの宴席を張り、歌や舞う有
様は見る人までも天国へいざなわんばかりで
ある。斯うした第一印象の下に知り合った此
所の住人達も亦誠に心温かで、私は前後二年
間をこの富貴館の一室を根城として、東京を
初め遠く茨木県の水戸方面にまで琵琶の旅を
重ねたものだった。

その水戸には曾って九段の行賞賜金部時代
に知合った高野と云う琵琶の方で少々先輩格
の友人が居り、その輪旋で慈善琵琶会に出演
の為め水戸へ行ったことがあった。主催者は
旧水戸藩士の子息で新派に属する琵琶の新人
だが、未だに芸人を卑下する土地の家柄とし
て、出演は遠慮しながらも好きな芸道は捨て
がたく、せめてもの思い出しに催したいのとこ
ろだった。

時は日露戦争終結後数年を経て出征兵士へ
の行賞が行われつつある頃、民間側でもジュ
ツ兵部寄附の慈善会が種々催されてあり、こ
の琵琶会もその一つだった。

私は水戸駅に着くとその足で主催者の許え
挨拶に行き、其処で意外にもテストを受ける
破目となり、若氣による爆発寸前の不興を胸
に収めて『川中島』を一曲演奏した、その室
は洋風の応接間で私はテーブル脇のジュー

タンの上に座し、彼親子は椅子に座して見下
けてゐるさまは何とも惨めな対照だつたらう。
こうした忍従に堪えたのも出征兵士への餞
けと思つたからであつた。しかも親父殿曰く
「あなたの芸はお座敷ではよいが、劇場の様
な広い舞台では、俵のやうな流派の方がうけ
るでせうね」と。

翌日私は三十分程早目に会場を訪れたが、
楽屋には誰も居らず、話声と物音で賑やかな
舞台の方へ行けば、門人らしい二・三人が馴
れぬ手付で演奏台などの整備中だし、来意を
告げる相手とも思えぬまゝ眺めて居ると、誰
か「もう時間ですから演奏の準備をして下
さい。」それは私へではなく仲間の誰かに告げ
たものと思つてゐると、私の前に一人現われ、
「用意して下さい」と命令的である。

之は意外、「私は招聘に応じてはるばる上州
からやって来た云わば客人である、主催者に
挨拶もせぬ内の出演は遠慮しよう」と断つた。
すると無言で引こんだ彼は、仲間達と交わす
言葉も聞こえよがしに「偉相になんだ、いま
に見ろ」と。その言葉が終るか終らぬう
ちに、ドヤドヤと数人の衆入りだ、主催者
はこの人達を迎えに行つていたのであつた。
やがて紋付羽織に仙台平の袴いかめしく、
無難作に挨拶しながら差出した名刺の肩書に
は東京のある新派に属する会の幹事とあつた。



狂醉亭漫録 (第九十七)

小山田庄左衛門

古谷 竟水



昭和甲寅歳旦、昨今四海浪浪々種かならず
と雖も、先づ年首の御祝詞を申上げる。
老生も明けて八十歳、追々枯衰の兆あり、
頭腦亦健忘に傾く。老軀を押し執筆致しま
すが、従来月例のものが或は途切れるやも計
られず、予めの御諒承をお願い申上げます。
今回は新春の事でもあり、固苦しい事を抜
きにして軟派に属するお話で、赤穂浪士の内
最後まで討入の覚悟を持ち乍ら、当日の土壇
場に於て僅かの油断から酒色に溺れ、討入の
機会を失し可惜不忠者として汚名を千載に遺
した小山田庄左衛門の脱落事情を記述するが
本件は義士関係の諸書にも見え、特に有名な
話でもあるので、比較的正確と見られる俗書
から要領を抜萃してご紹介する。

大石内蔵助は仇討決行は、元禄十六年三月
十四日が故主内匠頭の子三回忌に当るので其の
前後にと予定していたが、其前元禄十五年も
押詰り師走を目前に控えた頃、聞者の知らせ
により、仇敵吉良上野介は伴佐兵衛に家督を
譲り、隠居して実子なる出羽米澤藩主の許へ
引移るため、十二月十四日夜松坂町の自邸で
別離の茶会を催す、との情報が入つたので、
内蔵助は急遽予定を変更し、十四日夜茶会終

了後の時こそ、上野介の在宅も確実なら、警
固の備えも手薄ならん為、討入には絶好の機
会と判断し、此時決行と覚悟を定め、同志と
も連絡し夫々の準備を完了した。

十二月十三日に至り内蔵助は、同志中万一
手許不如意の者ありて借財等を残さば未代迄
の名折れと憂慮し、同志の者数名を選び出し
之に金子を渡し同志の宅を歴訪、負債等の精
算に廻らせたとあるが、偶々小山田庄左衛
門は本所深川方面を受持つたのである。

小山田は文武両道に勝れ、志操堅固な立派
な武士であつたが、一つ玉に墮は酒癖の悪い
事でも、非常な大酒家だ泥酔すると前後不
覚に陥り、是非善悪の判断が付かなくなる悪
癖があるので、内蔵助も平素から之を戒め、
本人も十分自覚して謹んでいたのである。

十二月十三日から翌十四日まで、小山田は
内蔵助から二百兩の大金を預り管内を巡回し
たが、病氣静養中の同士三村次郎右衛門が多
少困窮してゐたので十兩渡した余は同志全員
恙なく、残金百九十兩を懐中に深川富岡八幡
門前に差し掛かる。前日からの雪も烈しく、
寒さも厳しい。フト見ると丁子風呂の行燈が
目についた。

丁子風呂とは武士等が刀剣の手入れの際錆
止めに使用する丁子油の少量を湯に混ぜたも
ので、香氣馥郁として邪気を払うものとして
通人間に珍重され、丁子油は丁子の花の蕾を
蒸溜して採取するもので、丁子の木とは多年
性喬木で高さ数米に達するものもあり、中国

其他で香料の原料として大切にされている。
若し小山田が通人ならば此の深川辺には単
に丁子風呂のみの銭湯と、丁子風呂を営業上
の設備として利用する遊女茶屋の二種ある事
に気付く筈であるが、残念乍ら彼は野暮天で
あつたばかりに此の区別を知らなかつた。

行燈を見て小山田は木村長門守の故事を思
ひ出した。即ち「我れ聞く往時木村長門守重
成は、前夜討死の覚悟して丁子風呂に身を淨
め、兜の八幡座と誓に名香を焚きこめ、河内
国若江堤に天晴れ戦死。家康公が御本陣にて
首実検の其折に誓よりたつ名香の薫り、可惜
武夫生前に充分覚悟なしたるか、是れなる死
骸の見事さよ、梅ヶ香を柳の枝に持たせつ
つ桜の花を見る如しと、嘆賞ありし物語、古き
書物に見え居たり。我れも今宵は吉良邸で、
討死致すや計り難し」という事で、幸い向う
の丁子風呂、体を淨め二つには温まって帰る
も遅くはあるまじ。と考へ、丁子風呂の格子
を開ける。出迎えたのは四十前後の垢脱けし
た女。どうぞこちらへ、と奥まった立派な座
敷に通される。座蒲団煙草盆から手埒りが出
る。寒いから一風呂浴びたい、と云へば、そ
れではと、黒縞八丈の薄綿入丹前に浴衣を重
ね着替へさせて呉れる。其時ドッシリ落ちた
財布を預け湯殿に入る。

柩目の通つた柵の角風呂、丁子の香りは馥
郁とする。襦一つの番頭が背を流してくれる。
湯から上れば座敷で茶菓が出る、続いて酒肴
を揃えた膳が出て、旦那様先づお一つ、と盃

を差す。寒さに冷えた体を丁子風呂で暖めた
湯上りの事。咽から手の出る思いだが、赤穂
離散の其時に、一大事をば果すまで、必ず酒
を飲むべからず、と大石からの厳しい戒め、
今日まで禁酒を守つて来たが、何と云つても
猫に腰筋、今宵討入するならば、明日の生死
も判らぬ身と、時刻を気にし乍らも、まよ
とばかり一杯受ければ、五臓六腑に込み渡る
一杯が二杯三杯となり、エ、面倒なと茶碗酒
もり時刻の事など頭にない。

此時襟をサツと開け、スラリと立った一人
の被、色は浅黒いが鼻筋通り、眼はバツチリ
と鈴を張り、着物は紺縮緬に白地絞りの松葉
の散らし、白地献上の博多帯、緋色の蹴出し
もチラチラと、小股の切れた辰己芸妓の伊達
姿。思はず顔と顔を見合す途端。オヤ小山田
の旦那様。其方お松でないか。と奇遇に驚
く。之は其の筈で、嘗て赤穂の神崎与五郎家
に使われていた女中お松の流れて末の仇姿で
あつた。互に差しつ差されつ飲み乍ら、女の
身の上話を聞けば、赤穂離散後は主家から暇
を取り、其後面親にも死別し、一旦嫁いだが
亭主も道楽者で永続させず、遂に離別して流
れ流れて此の有様、ツイ先日から勤めに出ま
したとの話、小山田も積る話に時刻を忘れ、
茶碗酒を重ねる間に泥酔し、討入も糸瓜もあ
らばこそ、の情態で遂にはお定りの二ツ枕に
三ツ蒲団、枕屏風に有明行燈、という寸法に
なるが、紙数が尽きました。(以下次号)

茶碗酒を重ねる間に泥酔し、討入も糸瓜もあ
らばこそ、の情態で遂にはお定りの二ツ枕に
三ツ蒲団、枕屏風に有明行燈、という寸法に
なるが、紙数が尽きました。(以下次号)

高槻城と

徳川家康のキリスト禁教令

辻 旭城

撰津国高槻、この稿を起草していると、な
つかしい京紘社植村真水師居住の地だけに、
思わずベンに血が通う。奈良、平安の文化を
支配した藤原氏一門の基礎をつくつた藤原鎌
足の本拠地は高槻であり、今もこの地でねむ
っている。

高槻は戦国時代の大阪に於ける戦乱の中心
となり、和田惟政、三好長慶、高山右近など
戦国武将の本拠地となつてゐた。抑も元龜二
年(一五七二)高槻城主和田惟政は、荒木村
重の攻撃を受けて戦死し、息子惟長が父のあ
とを継いでいたが、惟長は撰津国高山の藩主
飛騨守と右近の父子を勢力争いで除こうと、
天正元年(一五七三)敵しく襲つたけれども、
戦上手な高山飛騨守、右近父子によつて敗れ
高槻城は織田信長から飛騨守に与えられた。
勇才智略の英雄飛騨守は藩政をとること数
年、輪既に五十路を越え織田家のために戦つ
た数多くの激戦と、戦傷のいたでに身体も弱
つてきているので、城主の地位を右近に譲り
自分は只管キリシタンの教えを、奈良に隠棲
のロレンソから受けた。そして飛騨守は豊か
な淀川に恵まれた平野、奥の山々を日々眺め
ながら平和な生活を送り、附近に奇麗な聖堂

謹 賀 新 年

〒173
東京都板橋区板橋一丁目二十一番四号
電話 (九六一) 一一〇〇番

池 上 作 三

〒569
高槻市津之江町二丁目二ノ三
電話〇七二六(71)六五八〇番

山 崎 旭 萃
山 崎 光 椽

筑前琵琶橋会宗範
大和流琵琶吟家元

〒870-12
群馬県高崎市岩鼻町二四七(局前)
電話〇二七三(46)二〇〇六番

宗家 針 谷 錦 古

全国朗吟文化協会関東副部長
テイチクレコード専属
群馬琵琶連盟会長

謹 賀 新 年

〒154
東京都世田谷区太子堂二丁目二番八号
電話 (四一四) 六五七八番

宮 崎 直 二

毎月第四日曜日一時~八時
琵琶と吟詠
月例親睦研究会
会場 東京・新宿洲鳳会館
電話〇三(三五二)七三六六
会費 五百円
御参会随意

〒343
越谷市大成町一ノ二三九二
電話 〇四八九(八二)
一二四一、一三番

会 長
鈴 木 流 泉

日本琵琶振興会

〒114
東京都北区田端町一五三
電話 (八二一) 六六六二番
振替 東京二〇〇四一番

理 事 長
鈴 木 鉦 次 郎

日本芸能顕彰会

謹 賀 新 年	
<p>〒950 自宅 新潟市米山西通り一四九番地 電話 〇二五二 (四四) 七〇九二番</p> <p>樋口 禁水</p> <p>錦心流琵琶一水会新潟支部長 新潟県琵琶協会 会長</p>	<p>〒662 西宮市羽衣町七ノ三四 電話 〇七九八(33) 五八八七番</p> <p>三浦 蓮水 會員一同</p> <p>錦心流琵琶 詩吟 蓮水会</p>
<p>〒124 東京都葛飾区立石一ノ十九ノ四 電話 (六九七) 五七三九番</p> <p>古家 絃風</p> <p>薩摩琵琶</p>	<p>〒184 東京都小金井市本町一丁目 八ノ五 電話 〇四二三(81) 三三四四番</p> <p>伊藤 磐水</p> <p>錦心流一水会多摩支部長 輝絃会 同人 各流派琵琶武絃会事務所</p>
<p>自宅 〒238 横須賀市富士見町三ノ一七 電話 〇四六八(二二) 三七七五 教室 〒124 東京都葛飾区堀切二ノ六〇ノ三 電話 〇三(六九四) 九五七七九</p> <p>史城 普門 義則</p> <p>社団法人東洋音楽学会 々員 邦楽 鶴鳴会 主宰</p>	<p>〒176 東京都練馬区北町二ノ三八 大宏ビル 四〇一号 電話 〇三(九三一) 二六二七番</p> <p>井上 義雄</p>

謹 賀 新 年	
<p>〒662 西宮市羽衣町七ノ三四 三浦 蓮水 方 電話 〇七九八(33) 五八八七番</p> <p>一水会神戸支部 會員一同</p> <p>錦心流琵琶</p>	<p>〒570 守口市緑町土居団地十一号 小川 吟水 方 電話 大阪(九九二) 五六二五番</p> <p>一水会大阪支部 會員一同</p> <p>錦心流琵琶</p>
<p>〒171 東京都豊島区高松三ノ十二 電話 〇三(九五五) 三六四五番</p> <p>藤卷 旭鴻</p> <p>筑前琵琶</p>	<p>〒164 東京都中野区中央一ノ三二ノ六 電話 (三六一) 七七四〇番</p> <p>仲川 秀邦</p> <p>薩摩琵琶正絃会</p>
<p>〒189 東京都東村山市美住町一ノ四 久米川公園 九ノ二〇四 電話 〇四二三(91) 九三二一 番</p> <p>法桂山 若宮 旭登</p> <p>筑前琵琶詩吟教授 日本旭会旭登会々長</p>	<p>〒617 向日市西向日鶏冠井町 山端二番地 電話 (九二二) 四五二二番</p> <p>梅原 旭濤</p>

謹 賀 新 年

〒651

神戸市葦合区上筒井五ノ四ノ二
電話〇七八(三二)一一六一番

宝塚花組

上原まり
(旭艶)

柴田旭堂

筑前琵琶・旭会・旭堂会

〒930

富山市太田口通一ノ六ノ二四
電話代表
(24)(25)三七四一番(店)
七六八六番(宅)

田中愛水
田中歴水

錦心流琵琶一水会富山支部
北陸琵琶同好会本部

〒420

静岡市西草深町二十一番二十号
電話〇五四二(五三)一四七一番

赤心流鶴翁
家元

吟詠
琵琶 赤心流

謹 賀 新 年

〒520

大津市逢坂一丁目一二ノ三一
(輝丸神社前)
電話 大津(二四)九三二八番

伊松
藤岡
旭旭
暢岡

〒060-91

札幌市中央区南六条西七丁目
電話(011)五一-一八三四八番

広川岳楓

〒573

枚方市御殿山南町三番
電話〇七二〇(41)七六〇〇番

松田旭波

〒544

大阪市生野区小路二丁目
電話〇六(七五三)〇三二五番
(七五一)〇六六七番

高千穂旭楓

〒573

大阪市東成区神路三ノ八ノ十八
電話〇六(九八一)二二九一四
夜間〇六(九七二)二七七八番

筑前琵琶日本旭会
東大阪旭会
会長
榎本旭風

が建てられた。

二十六才の若き城主高山右近は、父の意志を継ぎ藩政に励んだ。かくして天正十年(一五八二)六月二日の払暁、明智光秀のクーデターによって信長が京都本能寺の露と消えたことは、琵琶歌によって天下に知られている。その頃秀吉は備中高松城攻略の真っ最中であつた。右近は信長の命を受け、秀吉軍応援のため高松に向つて将兵と共に行軍中、注進によつて本能寺の変を聞き急遽高松に帰城した。昔から高槻は京都への軍事上の重要々地であつたから、明智勢は早速こゝを攻めるに相違ないと思われたが、右近の奥方ユヌタは二人の幼児を抱えて、家臣と共に死を決して城を護る心構えをしていた。然し意外にも光秀は高槻城を攻撃しなかつた。右近は之を神慮の賜ものであると思つた。それから間もなく秀吉は毛利と和を結んで、光秀討伐のために帰つて来た。

六月十一日尼ヶ崎で秀吉は諸將を集めて作戦会議を開いた。池田恒興は先陣をすと主張した。中川清秀も自分が先陣だと頑張つた。そこで右近はおもむろに進み出て「昔から先陣は敵に近い城主を当てるのがならいである。されば拙者の居城は高槻で山崎に接している。そして光秀は今山崎に在る、故に先陣は当然拙者がなすべきだ。清秀は茨木城主だから二陣、恒興は子息藤九郎が花隈の城主だから三陣が然るべきで、拙者の領地近くで合戦があるのに、他人に先陣を奪われるのは武門の恥

と心得る。」右近の発言は道理に叶つているので、秀吉は右近に先陣を命じた。

六月十三日払暁、池田恒興父子が山崎に着したが、山崎宝寺の南門は堅く閉ざされ一兵も入ることが出来ない。その門を守つてゐるのは右近の部下三五〇余名の将兵だつた。この戦で右近方は敵の首級三五〇を得たが、味方の損害は極めて僅かで、右近の将兵がまづ先に、その後から二陣三陣の中川、池田兵が続々とつづく。この合戦に光秀軍は全く敗れて後退する途中、山城國小栗栖村の竹藪で土民のために殺された。右近は翌十四日光秀の居城龜山を陥し入れ、更に進んで近江坂本城を攻略した。

慶長十七年(一六一二)家康は、京都所司代板倉勝重に命じて教会を破壊させ、また江戸大奥の女中、小姓や、徳川近臣旗本の内キリシタン垂教者を捕えて処刑した。この禁令は加賀に達したので、前田利長は言葉を尽して右近を改宗させようとしたが、右近は勿論之に應じなかつた。この時右近は六十二才。右近は追放されることになつて大阪に出た。それから海路長崎に送られることになつた。金沢から京都に越す山道は雪に覆われている。右近は老齢ながらいつも先頭に立つて節を示した。金沢進発して十日の後坂本城に到着、京都所司代は、右近一行が京都に入ればその信仰が京の人々に大感動を与えるだろうと考へ、家康の指令あるまで坂本に止どめた。坂本滞在中の右近を、豊臣秀頼の使者が大坂に迎えようとして訪ねたが、右近は既に長崎へ出発したあとであつた。

箱根にて

滝原流石

箱根路や野菊も白く眼にひろふ

杉雨音なく木肌を洗ひ秋気澄む

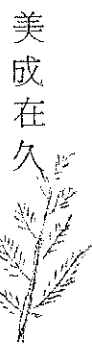
金時も双子も霧らふ雨の宿

薄紅葉遠嶺は墨曇雨の宿

大雄山鉄の高下駄重く冷ゆ

草の穂に触るれば動くものあり

花すすき招けど過去は振り向かず



美成在久

悪成不如改(莊子)

田中歌水

私達琵琶人も亦心すべき名言である。美の成るは久しきに在り、悪の成るは改むるに如かず。私達にとつて美とは、悪とは何の事か、何なのかはさて置き、美の完成への道は長い練習の積み重ねである。正に道は遠いと云うほかはない。否一生をかけても到達は至難である。これに反して悪い事の結果は直ぐ亦やつて

来る。それは悪と気がついて改める暇もないうちに。人間関係も亦かくの如し。お互いに信頼し合える迄には久しき時間がかかり、これに反して不仲になるのは忽ちのうちに起る。高尚な趣味に生きる御人でも、周屈を見廻せば自明である。己れに敵しく人に寛大でありたい。

駿府行



ばくすい

秋雨けむる十月十日(土)午前九時十九分京都発新幹線こだま号で田中鴨水、梅原旭齋矢吹華水、平井春嶺、植村真水の一行五人が車中賑かに東に向つた。同日十一時から静岡で開催される森鶴翁氏主宰の赤心流秋季琵琶演奏大会に招待を受けて出演のためである。正午前静岡市に到着の時分には雨もあがり時々さわやかな日の光もさして、会場の駿府城内静岡県婦人会館には既に多数の聴衆が席に着いて、次ぎ次ぎと繰上げられる琵琶、詩吟の演技に浸つていた。

三階の楽屋では森会長や前後して到着の地元附近をはじめ東京、横浜等の諸氏らと久闊を序し、いつもながらの和やかな楽屋独自の気分を満喫して、六時の終演まで時間の経つのも忘れ、演奏会場では赤心流会員の詩吟数

番に交つて東西の各流派琵琶人がそれぞれ一曲を熱演して聴衆を喜ばせた。

終演後会場舞台上で記念撮影の後一同懇親会場に向われたけれども、京都組は翌日の予定を持つていたので之を辞退し、そのまゝ同夜の新幹線で帰京したが、仲々心忙がしいのも楽しい秋の日であつた。因みに当日予定されていた東京からの剣詩舞二名人が暴風雨のため乗り物の都合で欠席されたのは誠に残念であつた。

(琵琶演奏)門琵琶合奏一鶴翁・鳳堂・竜堂・初心、澤陽江一松永初心、狩野の雨一市川竜堂、桶狭間一森鳳堂、白虎隊一焼津広住秋水、光秀一東京福田雅手、大楠公一京都田中鴨水、粟津の巴一東京望月啞江、曲垣平九郎一京都矢吹華水、吉野懐古一横須賀石井桑水、時は今也一京都平井春嶺、屋島一鶴翁・舞伎間歌仙、三方ヶ原一浜松小野鶴彦、新撰組一京都梅原旭齋、舟弁慶一横浜中谷襄水、富樫の涙一京都植村真水、琵琶塚一東京鈴木流泉、弁内侍一静岡岡尾鶴城、石童丸一赤心流鶴翁。

第十二回

三浦蓮水秋の大会



西宮市文化祭参加の首記は十月二十八日(日)昼十二時半から市立夙川公民館松下ホールで

横浜中谷襄水、東京水藤五郎両氏をゲストに迎えて華々しく開催、前夜来の豪雨も天祐か朝には晴れ上り、開幕と同時に五分の入りで程なく四百の椅子席は満員となり、生花や日本芸能顕彰会から三浦桜泉女史に贈られた吟道楯が美々しく飾られた舞台で、故水藤錦穂名人の録音「楊貴妃」、蓮水女史の「戦艦大和」その他琵琶十三題、詩吟詩舞二十九題が上演されたあと記念撮影に続いて祝盃を挙げ意義深いこの大会の成功を祝つて散会した。(演奏者と曲目前号八頁「錦心流琵琶と詩吟詩舞の会」参照)

京都琵琶協会の紅葉狩

紅葉狩



京都琵琶協会では、十一月十七日(土)午後一時京福電鉄八瀬駅に集合、錦織の比較山や、三千院、寂光院へ通ずる道の両側の楓を觀賞しながら約一軒にて料亭「西塔」に到着、少憩後近くの九頭龍弁財天に参詣、お灯り、線香等を供え、神官からお払いを受けて身を浄めた。われわれは琵琶人である旨を伝えると神社発祥後十九年になるが琵琶と琴との奉納のみ一度もなく、昨日までは七五三詣りのため雑踏したが、今日は参詣者も少なく、きつと弁財天様が一番好きな琵琶をしみじみ聞きたい為皆様をお招きになったのでしよう、ど

うそ奉納して下さいと望まる。そこで薩摩平井春嶺、筑前矢吹旭美津兩名の合奏にて「門琵琶」を献奏した。その清々しい冴えた音色は、洛北大原野にひろがり、錦繡の山々にこだまして壮麗、優婉さぞ弁財天のみこころをおなぐさめしたことでしよう。神官より、過分の御礼の言葉を頂き、記念撮影後「西塔」に掃り月例茶話会を開催、平井春嶺が「寂光院」を弾奏、続いて安住旭康、矢吹旭美津が「禪師と正宗」を上、下に分けて演奏した。釣瓶落ちの秋の陽は暮れ、今日も静かに夕べのとはり洛北の野を一面に包む。清潔な風呂に入り、四明会栗本天芳師の発声で乾盃し、温かい寄せ鍋にて交歓、栗本師が八十八才とも思えぬ若々しい声で馬子唄を披露、一同の拍手喝采を受く。欲は尽きねど午後七時半散会した。参加者(京都琵琶協会)古谷寛水、戸田旭公、木村維水、牧 雨水、田中鵬水、梅原旭濤、安住旭康、矢吹旭美津、平井春嶺。(四明会)栗本天芳、杉本治作、有馬南城、長谷川博章、藤崎天光。(平井記)

熱気溢れた



三ツ和会演奏会

初冬とは云いながら風のない穏やかな日さしの十二月二日(日)昼十一時半から京都東山の安井金比羅宮会館で、新しく発足した旭

濤会(筑前旭会)、三美会(筑前橋会)、春嶺会(薩摩)の三会員達が、流派を超越して結成した三ツ和会発会演奏会が開催された。豊敷和室の会場には和やかな雰囲気も満ち、開場間もなく七分の入りで二時過ぎには満員の盛況を呈し、奇麗な生花を飾った舞台で幼少十才から八十の高齢者まで、色とりどりの男女会員二十人が今日を晴れと熱演して聴衆を喜ばせ、間を縫って梅原旭濤、矢吹旭美津、平井春嶺三各会長の模範演奏を組入れて気分一新をはかるなど、プログラム作成の苦心がうかがわれた。

特に気持ちのよかったのは、老幼を問わず一人々々が舞台ズレのない真面目一点張りの真剣な態度で一生涯懸命に演奏されたこと、何とも云えない新鮮味を覚え好感が持てた。また、傍らの屏風の蔭で三師匠が、自分のお弟子さんの演奏にアドバイスをしているのが隙間から見受けられ、師弟愛に充ちた嬉しい光景であった。

五時半全演奏終了、記念撮影の後今日の成功を祝して乾盃し、七時過ぎ散会した。

赤垣源蔵・渡辺旭寿、金剛石・平井幸生、君ヶ代・堀井功、衣川・清水旭萃・田華旭順、湖水渡・細川賀代、薩摩の乙女・山崎旭栄、白虎隊・串田真一郎、常陸丸・梅原旭濤、堅田落・岡本旭村、元旦の富士・斉藤みつえ、城山・才田錦嶺、禪師と正宗・一坊寺清、那須与市・一坊寺旭澄、弁財天・永井佳江、川中島・富岡旭雄、水天門・平井紅嶺、桐一

葉・矢吹旭美津、秋風故郷山・国友旭香、別れの盃・西村旭富、鴨川の露・富山旭貴、新撰組・相良旭輝、大橋公・田中旭法、本能寺・平井春嶺。(外に病氣等で五人欠演)

琵琶道業蹟章 日本芸能顕彰会の昭和四十八年度琵琶道功蹟章を授与する該当者は東京三位研修同志会の大村鼓城氏に決定し去る九月十日附を以て授与された。師は青年時代(明治四十四年)伊集院鶴城師の門に入り爾來斯界の大家であった入江三舟、寺尾彰の両翁に交流し技を磨くと共に斯界の普及発展に貢献、今日八十才の高令を以てかくしゃくとして琵琶界に活躍されている。

小金井市 市制十五周年記念のため十芸能音楽祭 月六日昼一時から夜九時まで小金井市公会堂で開催され西郷隆盛・伊藤馨水、川中島・加藤喜水・中島瀑水・木村修水・石井効水・伊藤馨水・清水源城、松の廊下・高杉洲三曲の琵琶演奏の外箏曲、民謡、日舞、バレエ、コーラス等十三題が披露されて聴衆を喜ばせた。

逗子市文化祭参加 十月十四日昼逗子市鉦水会琵琶演奏会 立図書館ホール、主管鉦水会、主催市教育委員会・市文化協会。金剛石・会員、母の教・大越、七郷落・幕内、

月下の陣・鉦聖、菅公・鉦澄、河内の宿・鉦藤、常陸丸・鉦好、白虎隊・鉦静、重衡・鉦邦、武蔵野・鉦泉、俊寛(上)・川崎楚水、石童丸・坂井田政水、屋島の誉・本庄糸水、大高原吾・三門葉水、桜狩・脇田湘水、五条橋・石渡誘水、静・女流会員合奏、本能寺・会主平野鉦水、伊豆の御難・高橋旺水、戦艦大和・顧問曾我竜城、湖水乗切・土橋映水、小栗栖・斉藤殊水、紅葉狩・石井桑水、竜の口・小田原鈴木謙水、雪の進軍・藤沢榎本山水、掛合川中島・東京藤川晴水・松本好水・内田琴水・鈴木琢水、乃木將軍・横須賀山田幻水・茨木・横浜中谷襄水、西郷隆盛・東京山口速水。

金剛石・合奏、紅葉狩・春日簾翠、毒饅頭・奥村壯水、石童丸・星山溪水、河川中島・村田知水、井伊大老・中川流水、新撰組・内田景水、雪晴れ・広田緑水、戦艦大和・八田錦璋、若き敦盛・坂井旭蘭、熊谷蓮生坊・戸田頌水、白虎隊・田中篁水、俊寛・富山田中歴水、戦回願・福井吉野洲水、屋島の誉・水谷充水、桐一葉・東京松岡遊水、竜の口・同秋嶺水。

昭和四十九年 本年の旭会全国大会 筑前旭会全国大会 は備後旭会(会長川崎旭海)の司会で十月十九、二十日の両日福山市民会館に於て開催が決定した。

岳城流城山会 十一月四日昼東京品川三秋季演奏会 州俱樂部。重衡・吉田瑞馨、絃岳瑞、菅公・伊藤瑞峰、五条橋・大宮凌水、小松の操(二)・津和田岳聖、光秀の最後・宮崎岳燈、元寇・石山岳殿、武蔵野・立野岳朝、川中島・札幌広川岳楓、湯陽江・新納岳窓、鉢の木・輕部岳瑞、六号落水艇・大塚岳峻、(以下来賓) 西郷隆盛・宮崎洲香、雪晴れ(上)・桑名洲聖、嗚呼宮城道雄・栗原雨竹、雪中梅・前田洲月、彰義隊・杉岳秀、白虎隊・生田晃堂、御夢の跡・鈴木岳亮。外に吟詠一。

筑前琵琶師範会 十一月四日昼博多日立第一回演奏会 ホール。松の廊下・坪内、絃旭清、吉野山懐古・北口・絃旭園旭秀園恭、湖水渡・久米旭信、羅生門・旭旭磨・絃旭馨、北の庄・空旭姚・絃旭清、月に思ふ・旭恵旭秀、園恭・絃旭園園惠園雅、綱館・旭昇忠勝・絃旭馨旭節旭洲旭俊、秋風故郷山・旭景・絃旭園旭恵、玉藻前・旭秀・絃旭馨、対王丸・樋口旭清、黒田武士・中村旭園、大石主税・末広旭馨、新琵琶桑五木子守唄。黒田節・十七人合奏。

琵琶・吟詠 十月二十日昼仙台市日劇舞秋の芸術祭 立フアミリーセンターホール、主催半田錦崇後援会。綱館・半田錦崇、俊寛・阿部吉洲、石童丸・大友真水、彰義隊・小形錦洲、屋島の誉・吉田錦溪、静・脇坂燈水、白虎隊・阿部錦仙、敦盛・菊地桜扇、川中島・赤間躑水、戦艦大和・南緑水、唐人お吉・東京宮崎洲香、西郷隆盛・菅野有水、本能寺・佐藤錦峰、風林火山・高橋翠操、明月逢坂山・東京鈴木流泉、小野訓導・同前田洲月、児島高徳・大友翠玉、吹雪の敵・半田錦崇。外に詩吟劍舞九題。

錦心流琵琶 十月二十一日昼金沢市婦人大演奏会 会館、主催一水会金沢支部。

田中旭嶺 十一月四日昼東京銀座交詢社秋の大会 ホール。五絃段・小絃旭邑・正赤垣源蔵・市川、月に思ふ・大升旭比沙・絃旭明、大高原吾・斉藤、鏡引・河井旭生、川中島・佐々木旭鳳、本能寺の姿・旭嶺、衣川・宮田旭松、絃宮田旭寿、四絃の調べ・旭嶺、外、扇の的・宮田旭弘、絃旭寿、湖水乗切・来賓輝錦司、湖水渡・須田旭綱、玉藻の前・齊藤旭邑、綱館・吉田旭明・田中旭公・春日井旭桂・絃旭静・旭紅、会津娘子隊・若林旭洋、山田長政・峯旭孝、曲垣平九郎・石河旭豊、奉書試合・宮田旭寿、野人文寛・田中旭嶺、伏見の吹雪・来賓吾妻江風。外詩吟二。

三位研修同志会 門琵琶・錦幽・錦道、第十回研修会 せらぎ・富田晴萌、旅大村鼓城、武蔵野・坂本錦道、初陣日本海・山本隆水、会津の華・杉山旗水、狂女・田戸桜丸、物狂・山崎錦幽。